

トピックス

信州大学附属病院の病虚弱特殊学級

— 院内学級開設から一年のあゆみ —

Special education program for chronically ill children in the Shinshu

University Hospital: Experiences of The first year.

南3病棟：下條 美芳

はじめに

日本の小児ヘルスケアは今新しい展開期を迎えている。疾病構造の大変化、特に新しい病気・いじめや虐待等にあい、不登校や心の病等「家庭・学校等の社会生活の病気」が出現し、入院・外来ケアの役割の変化が必要となってきた。また小児癌患児の治療、生存率の向上により倫理・人権面からインフォームドコンセントや告知、ターミナルケアの質の向上など重要な課題となってきた。日本の現状では成長・発達を確保する小児ヘルスケアシステム¹⁾(遊び・学習・心理的配慮)への取り組みが未だ不十分である。教育は子どもの権利としてさだめられており病院内学級での学習は小児ヘルスケアの向上になくてはならない施設である。現状の当大学病院の小児科病棟を含め入院中の子ども達の学習環境は決して満足のいく状況にはなかった。私達は患児の家族と共につよい感心をよせ院内学級の開設を望んだ。当大学病院に院内学級が開設され12ヶ月が経過した。院内学級は教育の継続の場であり、成長・発達過程にある子どもにとってかかすことのできない重要性をもつものである。入院や在宅にあつて療養を続ける子どものクオリティ・オブ・ライフを向上させる視点からも必要である。²⁾教育の関わりは個別性を考え、院内学級で楽しく学ぶことが子ども達の治療にとって大きなプラスの相乗効果をはかれるので報告する。

1. 院内学級の概要と出席状況

院内学級は平成8年度松本市旭町小学校・中学校が信州大学医学部附属病院に設けた、病虚弱児童・生徒の学級である。入学資格は諸々の病気のために病院に長期(目安として1ヶ月)入院して病気の治療にはげんでいる小学生・中学生で主治医の許可のおりた者。教育内容は1年生から6年生迄いる院内学級では音楽や図工を除くと必然的に個別学習が中心となる。その子のレディネスにあった学習材が綿密に準備され、内からの願い「勉強したい」との意欲と学習材との出会いによって主体的な学習を先生方が目指して取り組んでいる。又遊びを取り入れ楽しく学習できるよう様々な工夫を配慮している。子どもの出席状況より4月から12月までの在籍人数は小学部で月平均12名・中学部で月平均5名であった。小学部の延べ人数は、23名・中学部延べ人数は、23名・中学部の延べ人数は13名であった。疾患は様々であり、小児科・脳外科・整形外科・皮膚科病棟からの子ども達が仲良く励まし合いながら学習に励んでいる。

2. 院内学級指導の概要

学習内容は通常の小・中学校と同じ。時間数が足りないので国語、算数(数学)、社会、理科(英語)を中心に学習を進めている。図工、音楽、家庭科、自由遊び、ビデオ学習は午後時間帯に行

っている。又長期入院と治療のため学習進度に差がでてくるので一人一人の能力や病状・治療計画に合わせて個人指導を中心に効果的に進めている。

3. 事例：院内学級への参加

OT君 13歳 中学1年 腎炎

腎生検のため入院，パルス療法を繰り返すが著明な効果が認められず，また原因不明の血小板減少があり治療が容易に進まない状態である。小学校6年の3学期から入院され安静を保つためベッドに寝ていることが多かった。院内学級入級式の時児童代表で挨拶を行う。挨拶のなかで「小学校の卒業式に出席していないので，中学入学となっても実感が無いが友達ができ，学習できることが嬉しい。」と延べていた。起床もきちんとしてできるようになり，予習・復習に熱心に取り組んでいる。中学の担任からはOT君と英語で挨拶をしてほしいと連絡ノートにメッセージが書かれていて，翌朝より看護婦が英語で声をかけると照れながらも英語で挨拶をしてくれる。

OMさん 15歳 中学3年 急性リンパ性白血病

再発のため入院を繰り返している。受験を控え学習ができないことを気にしていたが話題にしなかつた。学級に通い始めると，あきらめていた高校受験を目指したいと母親や看護婦に話すようになる。学習や入院生活にもはりがみられるようになり明るい笑顔が多くなってきた。又通級時は低学年の世話をしている姿をよく見かける。

OSちゃん 9歳 小学3年 急性リンパ性白血病

初回入院で化学療法中である。芯が強くはっきりした性格のSちゃんは入院時より母親とドリルなどの自己学習をしていた。よほど吐き気が強くて起き上がれないとき以外は，熱心で大人の心配をよそに午前午後と通級している。病棟に帰ってから声を出し九九の練習をしている。学級はおもしろいことがあり楽しいと言っている。

多くの児童・生徒も学級での学びを楽しみにしており，よほど体調が辛くないかぎり院内学級へ通級している。

4. 現場のシステムと協力体制

1) 場所は平成7年新病棟建設に伴い，旧中病棟4階の2部屋を学級に1部屋を職員室兼ボランティア控え室として整備し使用した。小学校で使用する部屋は，以前プレイルームとして活用していた部屋である。この部屋は，カナダの小児病棟を訪問されたS医療短大の先生のアドバイスで壁面に絵が書いてあり，学級になるにあたっては楽しく学べる場にしたとの願いもありそのまま使用している。また，学級まで体の状態で行けない時にはベッドサイドでの学習となるので，各病棟では学習できる環境をつくるように配慮している。

2) 時間は，治療・体の状態から学習時間を午前9時30分から12時とした。すこし慣れてきたら午後1時30分から3時までとする。各病棟では治療や看護ケア計画の調整等をおこなった。

3) 学級との連絡は，担任・担当医師・入級児童や生徒のいる病棟婦長・総務専門職員・副看護部長による話し合い。次回より院内学級懇談会とし，3ヶ月おきに様々な問題や行事および児童・

生徒の病状把握を行っている。日々のことは連絡ノートによる情報と助言を提供する。記入は夜勤の看護婦がしている。

4) 総務専門職員の確保は学級と病院との窓口であり、調整役として活躍していただいている。入級・退級手続き・必要な備品や予算についての相談・懇談会・PR活動等。

5) その他、先生が小中学校各一人のためベッドサイド学習をしている生徒には、ボランティアの協力をえて学習援助を行っている。更に高校生患児からも学習を見てほしいと期待と希望がだされている。

4. 考 察

1) 患児の院内学級への推進

長年に渡り病弱教育の制度が行われていないため学習環境の改善はシステム化されずにきた。そのために子どもや両親への影響は大きく、長期欠席による学業の遅れにたいする不安、友達が遠ざかる等多数の問題をかかえながらも長期入院を続けなければならない状況におかれていた。

小児は成長・発達を確保してもらう権利（成長・発達権）をもつ。³⁾ 成長・発達に必要な要素はQOLを満たす要素と共通し、「愛される・遊び・学び」が中心となる。

学習権は障害の有無、病気・入院の有無をとわずすべての子どもがもつものである。子どもの入院状況は変化している。小児人口の減少に伴い小児病棟は縮小傾向にあり、大人との混合もみられるような状況におかれている。さらに専門的な治療をうけるために大学病院へ入院する傾向である。学習は、様々な経験や知識をとおして成長・発達することであり、子どもの生活そのものが学習である。入院が長期になれば長期欠席が続くために様々な問題がでてくる。そのため忙しい業務の片手間に教える看護婦や医師・学生の係わりでは、不十分であり計画的な学習が必要となってくる。患児のQOLを向上させる視点からも院内学級の開設ができたことは重要である。今後は教師の確保や学習環境の充実に努めていきたい。

2) 看護婦の役割

小児看護の視点は病気だけでなく、子どもの成長・発達課題の達成や家族ケアまでもふくむ包括的なものである。学習に関する看護婦の役割をまとめてみる。

(1) 学習促進の調整役

治療計画に沿った各個人の感染防止と安楽の視点でそれぞれにあった看護計画を立案し実施していく。心理的援助を十分行い、患児を励まし勇気づけていく。

(2) 他の関係者の調整・連絡役

患児の代弁者となる。学級等の活動の仲介・調整を行う。

(3) QOL向上、学習促進のために病棟の環境整備・保持

ベッドサイド学習の条件整備にも気配りする必要がある。

3) 院内学級で期待できる効果

(1) 生活のリズム、ストレスの解消、心のケア、治療への意欲がうまれる。

限定された生活の中で、だらだらした生活にリズムや目標が生まれ、療養生活にうるおいがみられる。[治療への手助け]

(2) 生活規則、運動規制からくるストレス、病状の変化や治療の辛さ、家族と別れている寂しさ、

不満等々の不安定な情緒など楽しく学習することで、辛さを忘れて気が紛れる。[精神面のケア]

(3) お互いに励まし合う友達ができる。

同年齢・異年齢の児童・生徒と楽しく話したり、ゲームをしたりして遊べる。

(4) 学力向上、もとの学校へもどった時の学習空白をなくす。

退院後の学校生活への不安、学習の遅れは大きい。限られた時間の中で、個々への個人指導を中心に基本的な学力向上を目指すことができる。

5. おわりに

子どもにとって院内学級は生活リズム・ストレスの解消・心のケア・治療への意欲が生まれ、お互いに励まし合う友達ができる。さらに学習するだけでなくつかの間の辛い、治療や病気のことを忘れさせてくれる、やすらぎ・癒しの場でもある。院内学級は楽しい。理科の実験もしたい。魚の飼育がしたい。音楽・図工が好きと生き生きとした意見や感想がみられる。又父母からは長期入院で学校のことが心配だったが学級ができたことで学習の継続ができ生活にも張りがでてきた。今後長期入院患児のみでなく、在宅ケアの子どもたちへの訪問や短期入院患児にも十分配慮して学級の発展に努めたい。

参考文献

- 1) 藤丸千尋, 山下文雄: 小児ヘルスケアと学習権の確保 小児看護 18(8):1032-1036 1995
- 2) 及川郁子: 入院中の子どもの学習環境をどう整えるか 小児看護 16(11):1436-1440 1993
- 3) チルドレンズ・ライツ刊行委員会編: チルドレン・ライツ 日本評論社, 東京 1989